

## ■ PCN だより

### PCN Volume 66, Number 1 の紹介

2012 年 2 月発行の Psychiatry and Clinical Neurosciences (PCN) Vol. 66 No. 1 には, Regular Article が 8 本, Short Communication が 1 本, 掲載されている。今回はこの中から外国から投稿された 7 本の内容と, 日本国内からの論文については, 著者において日本語抄録をいただき紹介する。

#### (外国からの投稿)

##### Regular Articles

1. Negative impact of migraine on quality of life after 4 weeks of treatment in patients with major depressive disorder

*Ching-I Hung, Chia-Yih Liu, Ching-Hui Yang and Shuu-Jiun Wang*

Department of Neurology, Neurological Institute, Taipei Veterans General Hospital and National Yang-Ming University School of Medicine, Taipei, Taiwan

大うつ病患者の 4 週間治療後 QOL に対する片頭痛の影響について

【目的】治療後の大うつ病患者における QOL (health-related QOL ; HRQoL) に片頭痛がどのような影響を及ぼすかについては検討されていない。

本研究では venlafaxine で 4 週間治療した後に大うつ病患者の HRQoL に対して片頭痛が影響を及ぼしているかどうかを検討した。【方法】大うつ病患者 135 名が登録され, venlafaxine 75 mg/日にて 4 週間治療された。片頭痛は *International Classification of Headache Disorders* (2nd edn) にて診断され, 短縮版 QOL 評価尺度 (SF-36) と Hamilton Depression Rating Scale (HAMD) にて評価された。治療後の SF-36 得点に対して片頭痛が独立した影響を与えて

いるかどうかを回帰分析により検討した。【結果】登録者のうち 75 名が 4 週間の治療を完了した。登録時に片頭痛を有する患者は HRQoL の身体の痛み, 精神健康とで低い得点であった。治療後には片頭痛の有無にかかわらず全患者で HRQoL のすべての領域で得点が改善していたが, 片頭痛を有する患者は, 治療後において身体の痛みと身体機能において, 片頭痛を有さない患者群と比較して得点が低かった。片頭痛を有することは, 身体機能, 身体的役割制限, 精神的役割制限の項目における低い得点を予測していた。【結論】片頭痛は大うつ病外来患者の急性期治療の結果に対して, 特に機能的回復を示す SF-36 の下位項目に負の影響を及ぼしている。片頭痛を有する大うつ病患者に対して抗うつ薬に加えて介入が必要かどうかの検討が必要であろう。

2. Medical students' beliefs and attitudes towards schizophrenia before and after undergraduate psychiatric training in Greece

*Marina Economou, Lily E. Peppou, Eleni Louki and Costas N. Stefanis*

University Mental Health Research Institute, Athens, Greece

ギリシアの医学部教育前後で比較した医学生統合失調症に対する考えと態度

【目的】本研究の目的は精神医学の教育前の医学生における統合失調症患者に対する考えと態度を調査し, どのような精神医学的な経験が必要であるかを明らかにすることである。【方法】最終学年の医学生に対して, 4 週間の精神医学教育の前後に, 統合失調症患者に対する考え, 態度, 取るべき社会的距離に関するアンケートを実施した。【結果】医学生は統合

失調症患者について、危険であるとか、怠け者であるとか、知性が低いとかの共通した一定の見方を持っているというよりは、統合失調症患者は予測不能あるいは人格が分離していると感じていた。さらに患者との社会的距離は、より身近に接することで縮まっており、社会的距離に影響を与えていた唯一の因子は精神障害を経験したかどうかであった。さらに重要なことには、精神医学の教育経験は患者との社会的距離を短くすることには殆ど役立っていなかった。精神医学教育の後に、ほとんどの医学生は、統合失調症患者については、回復が困難であること、病態についての洞察がないこと、合理的判断をなせないこと、就労困難で社会的な危険性があることなどのネガティブな考えを持つようになっていた。精神医学教育は社会的距離を縮めることに役立っていなかった。【結論】統合失調症患者への偏見をなくすためにエビデンスに基づいた十分な教育方法を開発するためには、精神医学の学部教育についてさまざまな要因を考慮したきめ細かい検討が必要であろう。

### 3. Reduced left uncinate fasciculus fractional anisotropy in deficit schizophrenia but not in non-deficit schizophrenia

*Omer Kitis, Ozgun Ozalay, E. Burcak Zengin, Damla Haznedaroglu, M. Cagdas Eker, Dilek Yalvac, Kaya Oguz, Kerry Coburn and Ali Saffet Gonul*

Department of Psychiatry, Neuroimaging Unit, SoCAT Project, Bornova, Izmir, Turkey

左側鉤縦束の FA 値は欠陥状態統合失調症患者で低下しているが非欠陥状態では低下していない

【目的】統合失調症はヘテロな症候群と臨床症状を呈する精神疾患である。欠陥状態症候群は陰性症状が前景にあることで定義されているが、欠陥状態症候群を呈する患者はそうでない患者群と比較して脳の構造や機能に違いがある。本研究ではディフュージョン・テンソル脳画像 (DTI) により欠陥状態とそうでない群との間に仮定されている前頭側頭連絡路について検討した。【方法】統合失調症患者 29 名と健常者 17 名とについて調べた。患者群は, Sched-

ule for Deficit Syndrome (SDS) と Positive and Negative Syndrome Scale (PANSS) により, 11 名が欠陥状態, 18 名が欠陥状態ではないと診断された。対象者は 1.5 T シーメンス MRI 器により撮像し Functional Magnetic Resonance Imaging of the Brain Library Software—Diffusion tool box software により解析した。【結果】欠陥状態患者群において左鉤縦束 FA 値は非欠陥群と比較して有意に低下していた。非欠陥群と健常群との開いたの FA 値に差異を認めなかった。【結論】統合失調症欠陥群では左鉤縦束の障害により前頭眼窩野と側頭野との連絡が障害されていることが示唆される。

### 4. Acute and transient psychotic disorders versus persistent delusional disorders: A comparative longitudinal study

*Frank Pillmann, Tobias Wustmann and Andreas Marneros*

Department of Psychiatry, Psychotherapy and Psychosomatics, Martin Luther University of Halle-Wittenberg, Halle, Germany

急性一過性精神病と持続性妄想性障害の比較：両者の長期経過を比較して

【目的】本研究の目的は、統合失調症ではない非器質精神病である ICD-10 で診断した急性一過性精神病性障害 (ATPD) と持続性妄想性障害 (PDD) との差異を明らかにすることである。【方法】14 年間に Halle-Wittenberg 大学病院で PDD と診断された全患者 (41 名) の前向き経過を、患者背景、症状の長期経過、社会的転帰について、同病院で過去に ATPD と診断されたコホート (41 名) と比較した。患者群の社会的背景は半構造化された面接により入手した。経過観察の結果は発症後 10~12 年に標準的な方法により解析した。【結果】PDD 患者群は ATPD 患者群と比較して、精神病状態の持続時間以外にも、性別 (ATPD では女性が多い)、発症年齢 (PDD で高い)、初回入院に至るライフイベントの数 (ATPD に多い)、症状の多彩さ (ATPD に多い)、陽性の精神病状態の持続 (PDD に多い) など多くのレベルでの違いが認められた。PDD 患者群は再入院の回数は少なかった。長期転帰については PDD のほ

うが ATPD と比較して妄想症状の持続が長いことと全体機能レベルが低いことにより特徴づけられていたが、陰性症状と自立性とは両群で差異を認めなかった。【結論】PDD と ATPD とは精神病状態の持続期間だけでなく様々なレベルで差異が認められたことから、両群は精神病性スペクトラムの中で別々の疾患群であることが示唆された。

5. Naturalistic exploration of the effect of osmotic release oral system-methylphenidate on remission rate and functional improvement in Taiwanese children with attention-deficit-hyperactivity disorder

*Ruu-Fen Tzang, Ya-Ching Wang, Chin-Bin Yeh, Cheng-Dien Hsu, Hsin-Yi Liang, Pin-Chen Yang, Hung-Jen Liu, Yu-Shu Huang, Helen Cheng, Ya-Chen Hsu, Shen-Ing Liu, Chia-Ho Pan, Ya-Fen Huang, Chi-Fen Huang, Yu-Yu Wu, Yu-Hsin Huang, Hui-Ching Liu and Hsueh-Ling Chang*

Department of Child Psychiatry, Chang Gung Memorial Hospital, Linkou Medical Center, Chang Gung University College of Medicine, Taipei, Taiwan

台湾における ADHD の寛解率と機能改善に対するメチルフェニデート浸透圧性持続放出剤の効果について

【目的】短時間作用型メチルフェニデート (IR-MPH) と長時間作用型浸透圧放出剤 (OROS-MPH) との治療に関して台湾の ADHD 患児の臨床現場において比較し、寛解率、回復率、機能改善、治療維持率について検討した。【方法】臨床現場の ADHD 患児 757 名、6~18 歳について機能レベルと治療維持率などを評価した。評価項目は、Swanson, Nolan, and Pelham, version IV scale (SNAP-IV-C) 中国語版, Clinical Global Impression-ADHD-Severity (CGI-S), Social Adjustment Inventory for Children and Adolescents (CSAICA) 中国語版, 介護者の満足度, 治療継続性, 副作用の頻度であった。【結果】SNAP-IV-C スコアでは、寛解率は 30.72%, 回復率は 16.38% であった。IR-MPH と比較して、OROS-MPH は大きな機能レベルの改善

と高い治療維持率と関連していた。【結論】適切な用量の OROS-MPH による治療は、IR-MPH と比較して、高い寛解率、高い回復率、高い機能改善であり、高い治療継続性を示した。

6. Prevalence and relation of dementia to various factors in Parkinson's disease

*Abdul Qayyum Rana, Muhammad Saad Yousuf, Sughra Naz and Nour Qa'aty*

Parkinson's Clinic of Eastern Toronto and Movement Disorders Center, Toronto, Canada

パーキンソン病の諸因子と認知症との関係・有病率

【目的】パーキンソン病は運動緩徐、固縮、静止時振戦を特徴とする慢性神経変性疾患であるが、認知症は認知機能を障害する機能障害であり、パーキンソン病の運動機能以外の合併症である。本研究ではパーキンソン病における認知症の頻度と年齢、性別、病期との関係について検討した。【方法】2005~2010 年の地域のパーキンソン病および運動障害クリニックにおける記録について調査した。【結果】全患者 310 名のパーキンソン病患者のうち 61 名 (19.7%) が認知症の診断基準を満たしていた。年齢は認知症の重要な因子であり、90% の認知症を伴う患者は 70 歳以上であった。性別は認知症の有無には関係がなかった。認知症が発症する病期については、パーキンソン病の病期の進行と共に認知症の合併が多かった。【結論】加齢と共に認知症の発症率は高くなり、病期の進展と共に認知症の合併は多くなることが示されたが、性別は無関係であった。パーキンソン病に合併する認知症の発症機序についてはさらなる検討が必要である。

7. Hyperprolactinemia induced by low-dosage amisulpride in Korean psychiatric patients

*Bun-Hee Lee, Seung-Gul Kang, Tae-Woo Kim, Heon-Jeong Lee, Ho-Kyoung Yoon and Young-Min Park*

Department of Neuropsychiatry, Inje University, College of Medicine, Goyang, South Korea

韓国の精神疾患患者において低用量 amisulpride により惹起される高プロラクチン血症について

【目的】低用量 amisulpride はシナプス前 D2/D3 受容体を遮断することによりドパミン系伝達を活性化する。したがって amisulpride はプロラクチン値を上昇させないことが期待される。本研究では各国の臨床現場において低用量 amisulpride の血中プロラクチン値に対する影響を検討した。【方法】300 mg 以下の amisulpride で治療された各種疾患の患者 20 名（男性 12 名，女性 8 名）について血清中プロラクチン値を測定した。【結果】amisulpride の平均用量は  $195.0 \pm 51.0$  mg/日，血清中プロラクチン値は  $76.1 \pm 43.4$  ng/mL であった。男性と女性とで amisulpride の平均用量に差異はなかったが（男性  $200.0 \pm 42.6$  mg/日，女性  $187.5 \pm 64.1$  mg/日； $P = 0.576$ ），血清中プロラクチン値は女性（ $110.7 \pm 49.3$  ng/mL）では，男性（ $53.1 \pm 15.9$  ng/mL）より有意に高かった（ $P = 0.021$ ）。【結論】低用量 amisulpride は患者の血清中プロラクチン値を上昇させる。この知見からは amisulpride の臨床有効用量において用量を減量しても amisulpride 惹起性高プロラクチン血症の予防には有効ではないことが示唆される。臨床家はたとえ低用量であっても amisulpride 投与中の患者の血中プロラクチン値に注意すべきである。

（文責：武田雅俊 PCN 編集委員長）

（日本国内からの投稿）

### Regular Article

1. Multi-channel near-infrared spectroscopy shows reduced activation in the prefrontal cortex during facial expression processing in pervasive developmental disorder

*Yoshihiro Nakadoi, Satsuki Sumitani, Yukina Watanabe, Mai Akiyama, Naomi Yamashita and Tetsuro Ohmori*

多チャンネル近赤外線スペクトロスコピーが示す広汎性発達障害の表情処理過程における前頭前野の賦活反応性の低下

【目的】広汎性発達障害（pervasive developmental disorders；PDD）における情動喚起課題遂行中の前頭前野活動を近赤外線スペクトロスコピー（Near-infrared Spectroscopy；NIRS）を用いて検討した。【方法】PDD 14 名と年齢，性別の一致したコントロール 14 名を対象とした。局所脳血流変化の指標として酸素化ヘモグロビン（oxygenated hemoglobin；oxyHb），脱酸素化ヘモグロビン（deoxygenated hemoglobin）を用い，日本人に標準的な表情画像を用いた恐怖表情処理過程における NIRS 信号の変化パターンを検討した。【結果】前頭前野における oxyHb 変化量は，コントロール群と比べ，PDD 群で有意に小さかった。【結論】PDD における恐怖表情処理中の前頭前野の機能異常が示唆された。

（精神神経学雑誌編集委員会）